

タイ国仏教の現状調査

藤 吉 慈 海

1 は し が き

これは1964年11月中旬から4カ月間、タイ・ビルマ・カンボジャ・南ベトナム・香港・台湾をめぐり、仏教の現状を調査した概要報告である。紙幅のつごうでタイ国仏教の現状調査の報告に限定することを、あらかじめおことわりしておきたいと思う。この調査は東南アジアの近代化ということにピントを合わせておこなわれているので、タイ国仏教の現状調査も、そのような観点に立って実施したわけである。まずタイ国仏教の現状を調査するのに、5つの地域を選んで調査することにした。このような方法をとることが妥当であるかどうか問題はのこるが、いろいろの事情からこのような方法をとらざるをえなかったからである。

筆者が選んだ5つの地域は、

1. バンコクとその周辺
2. アユタヤ (Ayutthaya) とその周辺
3. コーンケーン (Khonkaen) とその周辺
4. チェンマイ (Chiangmai) とその周辺
5. ソンクララー (Songkhla) とその周辺

である。もちろんできるだけ多くの地域を調査することが望ましいが、調査の便宜上、これだけの地域を選んだわけである。つまり、大都市の仏教をバンコクで、普通都市の仏教を、中部タイはアユタヤ、東北タイはコーンケーン、北タイはチェンマイ、南タイはソンクララーにおいて、調査したいと思ったからである。なおこれらの都市周辺の農村寺院を調査に含めたのも、都市のみならず、村落における仏教事情を知ることが、非常に重要であると思ったからである。その調査要領は、仏教関係の大学、官庁、寺院、協会等を訪ねて、その活動状況を調査し、仏教界の指導者や信者との面接によって、彼等の宗教的自覚の程度や、寺院と民衆との関係、仏教の将来性等についての意見をきいてみた。もちろん、短期間の調査のこととて、限られた資料を提供しうるにすぎないが、これらを基礎に

して、タイ国における仏教の実態をつかみ、その近代化に対する役割を考えてみたいと思う。まだ調査も不十分でよく整理されておらず、考察を深めるべき点も多いが、この調査に協力してくださったタイ国文部省宗教局、WFB 本部をはじめ、飯島茂・水野浩一・矢野暢・桂満希郎の諸君に感謝しつつ、一応その概要を述べてみたいと思う。

2 タイ国仏教の一般的特質

1960年の国勢調査によると、タイ国の宗教別総人口は2,586万人で、その93%が仏教徒である。しかしこの中には1.7%の中国系の大乗仏教徒を含んでいないので、その数はさらに増加するわけである。1964年の発表によると、その人口の93.4%が仏教徒で、その数24,173,044人と推定されている。さらに23,378の寺院と、151,560人の比丘、87,010人の沙弥、1,947人の尼を有することを考えると、タイ国は世界有数の仏教国といわねばならぬであろう。もちろん国民は信教の自由を許されてはいるが、この国の仮憲法には、国王はすべての宗教の保護者であり、国王自らは仏教徒でなければならぬと明記されている。事実、現国王プーミポン・アドゥンヤデート (Phumipol Adulyadet) は1956年にみずからワット・ボーヴォンニウェート (Wat Bovoranives) で2週間出家生活をされた。そして1957年5月には王室の支持のもとに、内外の仏教徒を招き仏滅2500年の式典を盛大に挙行したことは、まだ人人の記憶に新たなことである。

さて、この国の寺院の大部分はマハー・ニカーイ (Mahanikai) に属し、その数22,402寺といわれ、わずかに920寺がタンマユット・ニカーイ (Thammayut nikai) に属している。この両派ともテーラ・バーダ (Theravada) 仏教で、東南アジアに一般的な戒律を主とする仏教である。したがって、この両派の間には教理的な差異はなく、法衣のつけ方や、多少の習慣の相違があるのみで、一見その区別を知ることができぬ

位である。しかし一般的にいうマハー・ニカーイの方が自由派で、タンマユット・ニカーイの方が厳粛派である。一般の人人はこの両派に対し何等差別観をもつことなく帰依しているのです、この国の仏教はその様式において極めて齊一的であるといえるであろう。これがその特色の第一である。

次にあげられる特質は、この国の仏教教団が非常によく統一され、強力な組織体をなしているということである。すなわち国王は教団の長として、Supreme Patriarch とかサンガラージャ (Sangharaja) と呼ばれる人をきめるが、この Supreme Patriarch は長老会議によってたすけられ、教団に関することを決定する。長老会議は Supreme Patriarch の外にソムデット (Somdet) 級の称号をもった比丘、その他 4 名から 10 名までの Supreme Patriarch によって任命された長老によって構成され、任期は 2 年間で、その Secretary General として文部省宗教局長が参加している。この下に各教区があり、それがまた市や町や郡等に細分され、Official monks がいて、各教区の統轄をしている。しかし各寺院はその住職によって支配されている。現在は 18 教区に分かれ、9 人の長老会議員がいる。また僧侶の教団を支持する信者の団体として仏教会があり、その支部が各地区に設けられ、仏教的な活動をしている。その仏教会の会長はタノム (Thanom) 首相であり、各地区の仏教会長はそれぞれその県の知事が兼ねている。この外、青年仏教会もあり、約 50 の支部がある。

第三の特質は、この国の仏教教団が政治的なことに関与しないということである。これは同じ仏教国において特異なことで、セイロンやビルマの教団が政治的なことにに対し活発な動きをするのに反し、この国の教団はよく平静を保っている。ベトナムは仏教国といっても主として中国系の大乘仏教が入っているのです、テラ・バーダ仏教国とは自らそのあり方が異なるが、タイ国では、仏教教団は政治の外にあって政治的なことにタッチしない。個人的にも教団としても、そのような態度をじしているのです、かえって政治家たちに尊敬され保護されているようである。政治面にタッチすることによって、教団への圧力が加わる場合もあるが、タイでは必要に応じ教団から政府に意見を具申することはあっても、直接政府の政策を批判したり攻撃したりすることはない。僧侶が政府の施策に協力して田地

住民の教育や伝導におもむいたり、軍隊の行進に浄水をふりかけて祝福を与えたりすることはあるが、仏教の教団は出世間性を維持しているのです、この国では教団が政治の動乱にまきこまれるようなことはなかった。これはこの国の仏教のユニークな特質といえるであろう。

第四の特質はタイは仏教国とはいっても、王室の儀式にはバラモン教の要素がかなり含まれている¹⁾、Popular Buddhism にはビー (Phi) 信仰との混同がみられるということである。教育の普及によって Phi 信仰の内容も変わってきてはいるが、ビー信仰は土俗信仰であるから一朝一夕にはなくならない。特に教育程度の低い田舎の人人の間に強いが、部会でもかなり多くビーハウスが見かけられ、僧侶の中にもビー信仰と仏教との区別の十分についていない人も多いようである。

第五の特質はセイロンやビルマでは、僧侶の還俗があまりよくないことと考えられているのに反し、タイ国では必ずしもそうではないということである。ビルマやセイロンでは出家する人も、還俗する人も次第にすくなくなっているが、タイ国では出家する人も多いかわりに還俗する人も多い。50 才以上の仏教徒の男子で出家した経験のない者は僅かに 3 % か 4 % にすぎないといわれている。今日ではいろいろの事情で出家しない男子の数は増加しているが、この習慣はすぐには消滅しないであろう。仏教の本旨からいって、出家することも還俗することも本人の自由意志によるものであって、なんら強制力はないわけであるが、その地方や国によって、受けとり方が多少異っている。タイ国では、出家することも還俗することも自由であって、一度出家した人が還俗しても、けしてそれを悪いこととは考えていない。むしろ場合によっては、出家して僧院で修養を積んだ者は、還俗して世俗的社会生活において、それをいかすことが大切であって、生涯僧院生活をする必要はないとすら考えられている。僧院はある期間、国民の修養する場所であり、人格形成の機関であるというふうに考えられている。したがって結婚する前に出家してパンサー (比丘や沙弥が雨期の 3 カ

1) H. G. Quaritch Wales ; Siamese State Ceremonies には歴史的にそのことが論証されているが、最近では Brahmanism の要素は非常に稀薄になっているといわれる。

月僧院にこもる期間、雨安居ともいう)の期間、僧院生活をするのが普通である。そしてパンサーが終ると還俗して世俗生活にかえるのである。したがって生涯僧院に止住する比丘はみずから使命を感じている人もあるであろうが、大体中位の僧であって、真に優秀な人物は還俗して世俗生活の中で在家として仏道を実践する。むしろその方が人間として真のあり方であるとすら考えられてきているということは、テラ・バーダ仏教国近代化の必然的結果であるとはいえ、まさに注目すべきことである。

さて1960年の国勢調査によると、タイ国の人口は26,257,916人で、タイ人が25,787,180人で98.2%を占め、シナ人が409,508人で1.6%, その他が61,228人で0.2%である。これを宗教別に見ると、仏教徒が24,563,523人で93.6%, イスラム教徒が1,025,569人で3.9%, キリスト教徒が150,053人で0.6%, その

他の宗教が518,771人で1.9%である。

さらに1948年から1962年にいたるタイ国における寺院数と比丘および沙弥の数は次の表のとおりである。この統計表によると、寺院数は1948年の19,150寺から次第に増加し、1953年に21,167寺に達している。そして、その翌年は20,741寺に減少しているが、比丘と沙弥の数はその前年より9,000人ほど増加している。寺院数は1955年に20,619寺に減り、それから次第に増加し1962年に23,322寺に達しているが、比丘と沙弥の数は1960年に255,539人の最高に達し、その後、1961年に240,122人、1962年に236,820人と次第に減少している。寺院に止住する比丘と沙弥の数は大体一寺院平均10人から12,3人である。

次に、まだ公表されてはいなかったが、宗教局の調査した1964年の統計によると、1964年の宗教別人口は、

仏教徒 24,173,044人 93.4%

3 タイ国の宗教別統計

Number of Buddhist Monasteries, Priests and Novices 1948-1962					
Year	Number of Monasteries	Number of Priests and Novices			Priests and Novices per Monastery
		Priests	Novices	Total	
2491(1948)	19,150	161,989	68,271	230,260	12
2492(1949)	19,592	175,179	76,520	251,699	13
2493(1950)	19,704	176,377	75,263	251,640	13
2494(1951)	19,823	165,628	73,835	239,463	12
2495(1952)	20,944	159,648	73,311	232,959	11
2496(1953)	21,167	155,097	76,457	231,554	11
2497(1954)	20,741	156,952	83,529	240,481	12
2498(1955)	20,619	154,910	86,108	241,018	12
2499(1956)	20,695	149,889	87,002	236,891	11
2500(1957)	21,371	154,478	91,347	245,825	12
2501(1958)	21,385	156,111	92,422	248,533	12
2502(1959)	21,570	150,025	94,278	244,303	11
2503(1960)	22,639	159,701	95,838	255,539	11
2504(1961)	22,920	152,787	87,335	240,122	10
2505(1962)	23,322	151,560	85,260	236,820	10

Source; National Statistical Office, Office of the Prime Minister : *Statistical Yearbook, Thailand*. No. 24. 2506, 1963.
Department of Religious Affairs, Ministry of Education : *Official Records*.

タイ国仏教の現状調査

イスラム教徒	1,025,564人	3.9%
キリスト教徒	149,655人	0.9%
ヒンズー教徒	3,485人?	
その他の教徒	35,180人	0.1%
儒教徒 ²⁾	460,237人	1.7%
無宗教	13,973人	

さらに僧侶や協会や寺院数は次のようである。

僧尼総数	240,517人
比丘	151,560人
沙弥 ³⁾	87,010人
尼	1,947人
寺院総数	23,378寺

タイ寺	23,322寺	マハー・ニカーイ 22,402寺 タンマユット・ニカーイ 920寺
-----	---------	--------------------------------------

シナ寺	23寺
ベトナム寺	15寺
ビルマ寺	18寺

協会総数	147所
仏教協会	110所
イスラム協会	24所
キリスト協会	9所
ヒンズー協会	1所
シイク協会	2所
バハイ協会	1所

タイ国にいるシナ僧は比丘が88人、沙弥が28人、タイ国にいるベトナム僧は比丘が97人、沙弥が6人である。タイの比丘のうち爵位をもつものが181人、教団の仕事をしている Official monk が5,530人、僻地教育等に従事している Monk teacher が15,569人ということである。なおタイ国に留学している外国人の僧は、ラオス人15人、カンボジャ人3人、ビルマ人7人、ベトナム人6人、マレーシア人19人、インド人4人、セイロン人2人、パキスタン人2人、韓国人2人、中華民国人2人である。

4 バンコクとその周辺の仏教

バンコクの市内にある仏教の寺院数と僧侶の数は次のようである。

バンコク	マハー・ニカーイ	タンマユット・ニカーイ	計
寺院	163	21	184

比丘	6,453	986	7,439
沙弥	1,568	276	1,844
トンプリ			
寺院	138	8	146
比丘	4,215	192	4,407
沙弥	1,115	8	1,123

このほか、シナ寺が17、ベトナム寺が7あるが、シナ寺やベトナム寺の大部分は、ここに集まっている。したがって、バンコクの大部分の寺院はタイ国風の建物であるが、中国人街にあるシナ寺は中国風の建築様式をとり入れている。そして、中国系の僧侶はタイ国僧とほとんど同色の法衣を着けているが、その着方や縫方は異っている。

バンコクには、ワット・ポー (Wat Po) やワット・プラケオ (Wat Phra Keo) をはじめワット・ベンチャマボピット (Wat Benchamabopit : Marble Temple), ワット・サケート (Wat: Sraket Golden Mount) 等観光寺院に類する美しい寺も多いが、宗教的に重要なのはワット・マハータート (Wat Mahathat) である。この寺は、バンコクにおける仏教的活動の一大中心地であって、ここでは常に瞑想や説教が行われている。この寺院に接してマハーチュラロンコン仏教大学 (Mahachulalongkorn Rajavidyalaya Buddhist University) がある。これはマハーニカーイ系の仏教大学で、University class; Preparatory class にそれぞれ約200名の僧侶が学んでいる。このほか、Dept. of special secondary school に200人、Buddhist teachers training school に約30名の僧侶が学んでいる。なお Secondary school には僧俗合せて約500人の男子が学び、Buddhist Sunday School には1600名の6～7才から30才までの男女が7年間仏教の授業を受けている。教師は主として僧侶があたっているが、外人の教授も招かれている。出版物は学術的というよりも啓蒙的な月刊誌ブッタ・チャック (Buddha Chakra) —タイ語—, Voice of Dha-

2) 儒教徒というのは中国系タイ人や中国人の宗教を指していると思われるので、これはむしろ大乘仏教徒とみてもよいであろう。

3) 尼というのは剃髪して十戒または八戒を保っている女性仏教徒のことで、剃髪しないで有髪のまま八戒または十戒をたもっている女性を含むこともある。

mma 一英・タイ両語一が刊行されている。僧侶への授業は午後1時から6時まで行われ、学生はマハー・ニカーイの僧侶のみである。

仏教大学としては、このほかにマハーマクット仏教大学 (Mahamakut Buddhist University) がある。この大学はワット・ボーウオンニウェート (Wat Boworanives) に隣接し、規模は小さいが約300人~400人の僧侶が学んでおり、タンマユット派の大学であるがマハー・ニカーイの僧も受け入れている。この大学の方が出版物等、より学問的なものが多く、外国僧も2、3名留学していた。ここでも在俗者のための Sunda School を附設し、仏教の普及につとめている。

大都市の仏教の活動の一つとして無視できないのは Meditation Center の活躍である。主な Center はワット・マハータート、ワット・パリナーヨク (Wat Parinayok) ワット・サケートにあるが、最も大きいのはワット・マハータートのウィパサナー瞑想センター (Vipassana Meditation Center) である。ここには冷房装置をした大きな Meditation Hall があって、椅子にかけながら瞑想している。Meditation の方法は主として Sattipatthana meditation であるが、トンブリのワット・パクナム (Wat Paknam) ではタイ独特の方法でやっている。各寺院とも説教をしたり集会をするのは毎月4回あるワン・プラ (仏日) の日である。この日は熱心な信者は八戒をたもち寺院に宿泊し瞑想をしたり、説教をきき読書をする。太陽暦とともに仏暦をつかっているタイ国では、ワン・プラの日は暦で決められているので、この日は特に仏教活動が活発である。ラジオやテレビによる布教活動も活発で、長時間にわたって有名な僧の説教が放送されたり、仏教的行事がニュースとして報道される。注目すべき活動の一つにワット・サケートの横にある Buddhist Teaching Research Center (心理輔導社) というのがある。仏教活動の一つとしてカウンセリングの仕事をしている。この国でも近代生活のストレスからノイローシス患者が多くなり、それらの指導にもあたっているそうである。このほか、バンコクには Buddhist Preast's Hospital がある。戒律を保っている僧侶は婦人のいる病棟に宿泊するわけにいかぬので、特別に僧侶のための病院や病棟が建てられている。ここには看護婦は1人だけいるが夜は外泊している。病僧たちは信者の供養によって治療をうけている

が、この病院では説教や仏教講演もなされている。ベッド数は200、一番多い病気はノイローシス、つきが消化器系の内臓疾患、第三が結核だそうである。

大都市の仏教は、いろいろの Activity をもっているが、この国でも社会生活の近代化とともに世俗化の風潮がすすみつつあるといえるであろう。出家する人の数も田舎に比し都会ではよりすくなくなってきた。出家は短期間の修養期間と考えられ、パンサーの時期に最も多く、生涯、出家生活をつづける人はすくない。国民皆僧という時代はすきさきつつあるようであるが、なお、この風習が続いていることは、この国の国民の精神的陶冶の上に大きな意義をもっている。タイ人は決して怠惰ではなく勤勉で利に敏感であるといわれる。仏教の諦観をあきらめと解して、仏教の普及の故に東南アジアの民衆が積極的活動性を欠いていると解するのは皮相的観察のようである。よし出家しなくても、大都市の寺院には多くのデク・ワット (寺男: Dek Wat) と呼ばれる青少年が住んでいて、比丘たちの世話をしながら各種の学校に通っている。彼等は静かな寺院の中で、勉強にはげむとともに、自然に比丘たちの感化をうけている。

さらに注目すべきことは、バンコックに世界仏教徒連盟 World Fellowship of Buddhists の本部があり、各国の仏教団体と連絡をとり、その推進力となっている。またここにタイ国仏教会の本部もあり、仏教活動のセンターとして、毎週活発な活動をつづけている。その他 Pali-Thai-English Dictionary の出版やタイ語版の大蔵経の解説書等の出版もなされているが、テーラバーダ仏教は大乘仏教のように教義が複雑でないので、国家の手厚い保護のもとにありながら、学問的研究はあまり進まず、仏教学者も決して多くはない。

バンコクの周辺の仏教についても論ずべきことは多いが、バンコクから東南に南下して、チョンブリー (Chonburi) やバンセーン (Bang Saen) 附近の寺院のなかで、ワット・アソカラム (Wat Ashokalam) は注目すべき大寺である。タンマユット派の寺で、比丘60人、沙弥30人、寺男5人止住しているが、このほか尼が100人位寺の内外にいて八戒を保っている。剃

4) 拙稿、タイ・ビルマにおける瞑想法 (印度学仏教学研究28) 参照。

髪している者としていない者というが、寺院の内にあるホールで長老尼の指導をうけている。またどの寺院の住職にたずねても、戦後、仏教は復興しつつあるという。事実、新しく寺院が再建され、ワン・プラの日には、どの寺でも説教をしているようである。

5 アユタヤとその周辺の仏教

アユタヤは有名な古都で仏教の遺跡も多いが、今日生きている寺院を訪ねてみると、2、3の注目すべきことがある。その一つはこの地域に散在する回教部落と仏教部落との関係を調査してみる必要がある。その二は中国系タイ人とタイ人との融合状態を寺院のあり方において見るができることである。その意味で調査した1、2の寺院の例をあげると、

(1) ワット・チャイヤモンコン(Wat Chaiyamongkol)

バンコクからアユタヤへはいる道路の左手に見える大きなチェディ(Chedi)のある寺で、ワット・チャオ・パセタイ(Wat Chao Phyathai)と呼んでいたが、セイロンから来た僧のためにウートン(U-Thong)王が1363年に建てた寺といわれている。この寺はワット・パーケオ(Wat Pakaew)ともいわれていたことがあるが、ここはアユタヤの町から東南方にすこし離れているので、比丘たちの瞑想の場所になっていたところと思われる。ビルマ軍により破壊されたが、現在はマハー・ニカーイに属し、新しい多くの仏像が建てられ、僧院も復興しはじめている。現在は比丘6人、沙弥1人、寺男4人止住している。托鉢も2kmほどはなれたところまで出ることもあるが、信者の人が持参してくれることが多い。説教はワンプラの日に2回やっているが、40人くらい来聴し、その中には八戒を保って夕食をとらないものもいるそうである。

(2) ワット・パネンチュン(Wat Phanaengchoeng)

この寺は市街の南の対岸にあるが、アユタヤがシヤム国の首府として建てられる26年前に建てられたものである。ここには高さ19米、幅14米の坐像の大仏があり、三宝仏公としてタイ人のみならず中国人にも信仰されている。南無阿弥陀仏と書いた幡もさがっていて、中国人とタイ人の信仰をあつめている。近くに中国人の墓地もあり、河岸の小庵には観世音菩薩も祀られ、「蓮光普照千家慶、慈徳遙開万户春」などを書いて

ある。ここからボートに乗り山田長政の遺跡や日本人街跡に行くことができる。

(3) プーカオ・トーン(Phukhaw Thong)

アユタヤの西方郊外に聳えるプーカオ・トーンと称せられるこの大寺は、現在巨大な塔の南方にシーマのあとがある。マハー・ニカーイに属し、比丘5人、寺男1人、尼8人しか居住していない。説教はワンプラの日にやるが、来聴するものは、4、5名にすぎぬという。この寺の南方に約100戸の回教部落がある。毎年一人はメッカに巡礼に行くそうである。仏教徒との間はスムーズで別に問題はないが、異教徒間の結婚はほとんどおこなわれないそうである。バンコクでも、自ら回教徒といわない限り、誰れも知らぬ位に仏教徒の社会に融合しているそうである。これもヒンズー教徒と回教徒との対立に比し、仏教徒の方がより寛容であるからとも考えられる。

6 コーンケーンとその周辺の仏教

コーンケーンは東北タイの代表的な都市で、新しく2つの大学が建設中である。バンコクからコーンケーンへバスがつうじているが、途中コーラート高原をすぎる。海拔400米位の高原であるが、ここがメーナム水系とメーコーン水系との分かれるところで、この高原のバス道路に沿って部落が散在し、高原のところどころには明地山荘とか長安極楽と書いた中国人墓地がある。人口2万のコーンケーン市にタンマユット・ニカーイの寺が3、マハー・ニカーイの寺が5ある。これらの寺を全部訪ねてみたが、一口にいて大同小異である。

(1) ワット・チューチャン(Wat Shuchan)

タンマユット派の代表的寺院で120年以前の建立である。比丘24人、沙弥38人、寺男73人、境内に沙弥たちのための学校もある。托鉢には出ていないが、5人から10人位、招かれてどこへでも供養をうけに行く。説教はワンプラの日に午前8時と午後3時にやっている。63才になる住職にきくと、16才で沙弥になり、ずっと僧院生活をしているが、人人の信仰心は変らない。戒律も時代に応じて変える必要はないという。寺の所有地や建物は県の文化局の管理に属し、その修理等は信徒が委員会をつくらせて信施を集めてやるので心配はないという。境内にはお墓もすこしあるが、仏殿、僧房、火葬場、説教所、鐘楼、仏足石、菩提樹等

があり、完備した大寺である。

(2) ワット・チューヌワン (Wat Shunuan)

マハー・ニカーイの代表的寺院で、比丘31人、沙弥66人、寺男70人も止住している大寺である。200年以前の建立で、この寺の住職はコーンケーン地方の教団の長をしている。52年間僧院生活をしているという老僧で、葉巻をくゆらしながら、煙草は戒律に禁じられていないからかまわないという。未成年の沙弥でも煙草をふかしているのを見かけるが、戒律尊重の仏教にも矛盾がある。瞑想もやっているというが、あまりやっているようには見受けられない。りっぱな火葬場があり墓や沙弥たちのための学校も境内にある。

(3) ワット・タート (Wat Thaad)

マハー・ニカーイに属する湖畔の大寺で、比丘25人、沙弥35人、寺男18人、200年以前の建立で美しい寺である。境内に沙弥のための学校もあり、60万バツで仏殿の再建をはじめ、先日上棟式をやり、タノム首相が臨席したそうで、その費用の20%は政府が補助している。説教はパンサー中はおこなっているが、それ以外は特別にやらないという。聴衆は30人位で、五戒と八戒を授けるそうである。しばらく話をしていると日・タイ親善のためにとて胸にかける仏像をくれた。このようなお守りの仏像がこの国ではよく普及している。

コーンケーン市の内外にこれより小さい寺が5つある。瞑想をやっている寺もあるが、多くはやっていない。托鉢もゆったりやらなかったりである。境内の設備も小さい寺ほど悪いが、どの寺にも比丘が10人以上、沙弥がまたほぼ同数止住している。説教はワン・プラの日に行うところが多く、パンサーの期間のみしかやらぬところもある。聴衆も10人から20人位で、なかには30人から50人位集まるところもある。信仰心が衰微しつつあると答える僧は1人もいなかった。

(4) ワット・タープラ・ホンサート (Wat Thapra Hong Thed)

コーンケーンから南方12軒の地点にある人口約5000人の Thapra という町にあるマハー・ニカーイの寺で、比丘20人、沙弥40人、寺男1人止住している。70年以前の建立で、説教は月4回ワン・プラの日に行っているが20人位集まる。パンサー中は必ずしも増えるそうである。ここの沙弥たちと会談する。年令差は10才位から20才にわたっている。托鉢には行かないが、

お経を読みに行くと10バツか20バツのお金をもらうそうである。それでアイスクリームを買って食べることもあるという。厳密に言えばこれは戒律にそむくことである。還俗する人は多いが、それはしかたないという。ほとんどすべての沙弥が結婚期に達するまでに還俗するようである。義務教育を受けたあと、成人に達するまで、行くところもないので、お寺に入ったという人が多いようで、熱心に仏教の勉強をしているようには見受けられない。

(6) ワット・プーワンラン (Wat Phoowanlang)

タープラから東へ約8 km入ったドーン・デー (Don Daeng) という戸数130戸の小部落にあるマハー・ニカーイに属する小寺である。70年位前の建立で、比丘6人、沙弥7人、寺男3人いるが、ドーン・デーと戸数約30戸のドーン・ノイ (Don Noi) の両部落の寺である。ドーン・デーには小学校があるが湖水に近い電灯もない小部落である。部落民は収入の平均約8%を寺に寄附しているといわれる。托鉢には必ず部落民がすこしずつ運んで来た食事を婦人たちが平等に分けて供養している。瞑想もやらず、説教はパンサー中に毎日午後4時から行うが、それ以外は何もやらないそうである。小学校の卒業式には住職が説教をしに行くが、寺院の活動は小学校の教育とは一応はなれている。寺の世話をしている3人の話をきくと、Aは6年間僧院生活をし、Bは10年間僧院生活をしている。Cは14才で義務教育を終え、16才で結婚し、僧侶になったことはない。僧院生活は非常によかったとA Bともに強調する。部落民の家で仏像や仏画のある家は数えるほどしかなく、夜ねる前に礼拝しているが、主なる礼拝の場所はお寺である。ピーを祀る風習もここには見受けられない。沙弥たちの生活を見ると、ここもまた仏教の勉強をしているようには思えないが、一応戒律は守っているようである。

コーンケーン市内にある St. Gerard's Catholic Church を訪ね Father Patrik Worrissy に面接する。タイ文化と仏教との結合が強いので、キリスト教に改宗するとタイ人でなくなるように思うのかタイ人で改宗する人は非常にすくないからタイではキリスト教の宣教は非常に困難である。日曜礼拝には100人位集まるが、これは古い信者でベトナム人や中国人が多く、ここに来て6年になるが、タイ人の改宗者は1人もない。ハンセン氏病患者に約200人の改宗者がある

が、これらの人人はすでにタイ人社会からはなれて生活している人人である。1882年にキリスト教の伝導がはじまり、現在5人の神父がいるがそのうち1人がタイ人である。また5人の修道尼がいて、そのうち1人がタイ人で Holy Redeemer School の英語の教師をしながら伝道しているが、成果はあがらないそうである。プロテスタントの教会もコーンケン市内にひとつあって聖書教室をひらいているが現在39人の生徒がいるだけである。

7 ソンクラーとその周辺の仏教

ソンクラーは南タイの代表的な都市のひとつで、人口約31,000人、タイ湾に面した港町である。附近には回教徒も多いが、仏教徒と回教徒との間は極めてスムーズにいつているようである。しかし宗教的行事はもちろん別におこなわれ、異教徒間の結婚はほとんどおこなわれていない。中国人も多く居住し、この町に中華民国の領事館がある。

ソンクラーにはタンマユット派の寺が2、マハー・ニカーイに属する寺が16ある。プロテスタントの教会が一つ、モスクが一つあるが、宗教上の争や衝突はないそうである。

(1) ワット・マチマ (Wat Machima)

タンマユット派に属し、市内第一の美しい寺で、比丘24人、沙弥9人、寺男136人止住し、寺外に尼20人がいる。ワン・プラの日は一日三回、平常日は夕方1回説教をしている。聴衆は15人位で、ワン・プラの日は八戒を保つ人が8人位いるが、寺には泊まらない。托鉢には出ず、パンサー中は瞑想をやる。100年以上もたった寺で、境内に壁画の美しい仏殿や、陶器・仏像・仏画を収めた陳列館がある。全体の雰囲気はワット・ポーを小さくしたような寺で、守護神像は中国風である。

(2) ワット・ヤントン (Wat Yangthong)

マハー・ニカーイに属する市内の寺で、比丘8人、沙弥3人、寺男36人、寺外に泊っている尼15人。説教は毎日午後3時30分頃にやっているが、15人位来聴する。ワン・プラの日には100人以上来聴する。托鉢は毎日やっているが、パンサー中は食事を持って来られるが、托鉢は修行として毎朝出ることになっている。瞑想はやっていない。住職に面接すると、出家する人の数は減っていないから、近代化と共に仏教に対する

関心はたかまると思う。仏教は迷信を排斥するが、自分もピーの存在を信じている。仏教は他の宗教とも仲よくせよと教えている。祈禱師のような者もいて差支えないと思うと述べ、非常に寛容な態度であった。

(3) ワット・ドンジェ (Wat Dondje)

マハー・ニカーイに属する寺で、比丘6人、沙弥1人、寺男52人、尼9人、説教は毎日午後5時にやっているが、10人位来聴する。そのうち2人は八戒を保っている。托鉢は毎朝やっているが、瞑想はやらない。ソンクラーでは一寺のみ瞑想をやっているが、よい指導者がいないそうである。ここでは歯痛止めの水薬をわけていた。住職に面接すると、仏教は昔よりよくなっている。比丘になる人も増加した。その理由は教育の普及と共に仏教をよく理解しようとする人が増加したからである。国の発展につれ宗教も復興する。王様が篤く信仰すると人民もこれにならい仏教も復興するという。ピーは必ず存在する。戦争中に日本兵がこの寺に泊ったが、ピーにいじめられて眠れなかった。この寺の僧はピーを見て逃げ出したことがある。には良いピーと悪いピーがある。悪人の侵入をふせき、善人を守るよいピーもいるし、人をおそれさせ狂人にする悪いピーもいる。ピーの存在を知った以上、宗教を信ぜざるを得ないだろうという。ピーを慰めるための儀式をしても差支えないが、仏教徒としては、そのような特殊な儀式はしなくとも、仏像の前で祈ればよいという。ワット・チェン (Wat Chaeng) というマハー・ニカーイに属する寺の住職は、ピーと結びついたこの国の仏教は、この国の近代化をこばみはせぬかとの質問に答え、たしかにそうかも知れぬが、方便としてピーに悩む人を慰めることもあってもよいではないか。仏教本来の立場からすると、そのようなものはなくともよいが、ピー信仰は事実としてあるのだから、どうにもならぬ。教育の普及によってピー信仰は薄らぐと思うが、どんなに科学が進歩しても、善ということを忘れてはならぬと述べていた。

(4) ワット・ボーラカム (Wat Borakam)

ソンクラーから西南方約20軒の地点にボーラカム (Borakam) という部落がある。そこにあるマハー・ニカーイに属する寺で、76戸、90戸、100戸の三部落によって建てられている。比丘6人、沙弥2人、寺男1人止住し、説教はワン・プラの日に正午にやって

いる。来聴するもの70人、そのうち50人は八戒をうけて寺に泊る。パンサー中は毎晩説教をするので、100人位集まり、50人位は寺に泊るそうである。托鉢や瞑想はやっていない。

(5) ワット・ナムカチャイ (Wat Namkachai)

ソクラから西方15軒の地点に道路にそったマハー・ニカーイに属する寺で、比丘4人、沙弥1人、寺男8人、剃髪しない尼が40人位いる。説教はワン・プラの日に午前10時にやるが、30人から50人の来聴者がある。そのうち10人は八戒をうける。パンサー中は毎晩説教をするので200人位集まる。そのうち10人位は八戒を受ける。托鉢はワンプラの日を除き毎日やっている。パンサー中もはじめの3日間はやらぬがあとはやっている。瞑想はやっていないが、かつてここにいた2人の比丘はやっていた。彼等はいま遊行中である。住職は42才のインテリらしく、自分は出家したことに満足している。社会も進歩したが宗教も進んだと思う。タイでは仏教は社会生活の一部だから、社会の発達なしに仏教の発達を考えられぬ。社会の発達とともに宗教の研究も進み関心もたかまるわけである。ピーーに対する考え方もまちまちで、現世から来世にいたる中間の状態を子供にはピーーといっているが、他の人には他の語でいった方がよからう。目に見えないものをピーーといっているから、ビタミンもピーーだ。よいピーーもあるわけだ。悪霊みたいなものをピーーと思っている人もあるが、私はそんなピーーは信じない。科学が進歩すれば迷信は滅びてゆくが、科学で説明できない領域もありはしないか。現代の科学は核を説いているが、それは仏教と矛盾するものではない。仏教のどのような面を現代において強調すべきかということが一番大切な問題だが、まず相手を知らねばならぬ。相手によってその強調するところは異なるが、一般的にいえることは、自分で見たものを信じよ。他人の言を聞いても信するな。よく自分で考えて自分の目でものを見よといいたい。仏陀もそのように教えているはずであるという。同席していた村長も、正しい宗教は科学を排斥するものではない。科学と宗教とはある時は衝突しある時は一致する。私はピーーの存在を信じないと強くいった。

この地域は大体、仏教と回教との境界線になっているが、仏教部落と回教部落は独立している。市場や学校では一緒になっているが宗教的な行事に関する限り

交流はない。異教徒間の結婚はほとんどなく、たまに例外的に家出をしてきた者同志の結婚はある。仏教徒の女は回教徒の男を低く見ている。食事の制限をうけるので、仏教徒の女が回教徒になった例はないそうである。この地方でも寺院のある部落とない部落では、寺院との関係がかなり異っているようである。ドン・キレク (Donkhilek) 部落で回教徒の占師(モー・ビー) にあって、会談したが今は割愛せざるを得ない。

8 チェンマイとその周辺の仏教

北タイの中心都市チェンマイには、マハー・ニカーイの寺80、タンマユット派の寺6、その他、仏教会館もあって、活発に動いているが、その1、2の例をあげると、

(1) ワット・プラシンルエン (Wat Phra Singh Luang)

マハー・ニカーイに属する代表的寺院で、比丘40人、沙弥80人、寺男60人止住している大寺である。境内には私立の学校を経営していて、在俗の生徒500人もいるが、皆男子のみである。比丘や沙弥のための学校も境内にあるが、6年制で600人の学生がいるそうである。その他、日曜学校もあるが、これには男女学生が200人位いるそうで、大学生もその中に含まれている。説教はワン・プラの日に午前9時と午後2時にやっているが、50人から60人位来聴するそうである。そのうち八戒を保つ信者は20人から30人位だそうで、特別な日には1,000人位集まることもある。在俗の人のために、夜瞑想の指導をしているが、2、30人集まるそうである。このような瞑想の実践は戦後さかんになったが、比丘や沙弥は学問をすることが先で、瞑想をやる人はすくないそうである。とくに沙弥は瞑想をするには若すぎると、この寺の副住職格の Prakru Aduls-eelagitti はいう。この人は日本へも来たことのある人で、ピーーについての意見をきくと、ピーーは一般に先祖の霊と考えられているから、ピーーをおそれて善行をする人もいる。したがって、ピーーの存在を強調もしないが否定もしない。説教師はこれを利用して説くと老人はよろこぶが、青年は反発する。北タイでは教師が不足しているので、比丘たちが援助をしている。チェンマイ大学の医学部と連絡して比丘たちに医療を教え、公衆衛生や環境の整理、農民の指導等、比丘たちは多方面に働いている。アジア財団がこれを援

助していることを感謝していた。

(2) ワット・チェディ・ルアン(Wat Chedi Luang)

市内にあるタンマユット派の寺で、比丘26人、沙弥24人、寺男80人、尼1人、有髪の尼4人いる大寺である。説教はワン・プラの日、朝夕2回やっている。托鉢はパンサー中も毎朝やっている。瞑想もパンサー中は指導者が来てやっているが、在家の人が20人から30人位集まるが、僧侶は4.5人しか来ないそうである。この寺には貧困少年の教育所があって、田舎から来た42人の少年が、信施によって教育されている。また境内に慈善学校があって現在202人の少年が教育をうけている。少女が含まれていないのは、女姓に対する戒律が厳しいからで、ここに一つの問題がある。この寺の住職は、少女に対する宗教教育は母親によってなされ、少女たちは寺へ食事を運んだり説教を聞くことによって十分になされているという。また33年間僧院生活をした住職にきくと、マハー・ニカーイとタンマユット・ニカーイとの間に、20年以前は争もあったが、現在はうまくいっている。得度式や布薩等の重要な行事は一緒にやることはないが、その他は一緒になってやっているそうである。戒律は現代と矛盾するものではないから変える必要はないが、説教のしかたは科学的知識をとり入れてなされねばならぬという。

(3) チェンマイ・ブッタ・サターン (Chiangmai Buddha Sathan)

市の中央にある仏教会館で、8年前の創立。Buddha Sathan Foundation の14人の委員によって運営され、そのうちに2人の比丘が含まれている。ワン・プラの日には講演があるが、多い時は2000人、すくなくとも300人の聴衆が集まるそうである。キリスト教やバハイ教にも使用させていて、会場費は1回200バーツである。会員は約100人で年会費15バーツである。事務員2人で、図書館、講演室、会議室からなっている。

(4) ワット・ネランタハーン (Wat Nelandavan)

チェンマイから18km南にハンドン (Hangdong) という村があり、その西方2kmのところにあるナムプレー (Namprae) という村がある。303戸の農家では、米、豆、煙草をつくっている。そこにあるマハー・ニカーイに属する普通のお寺である。約1.5軒はなれたところにもう一寺あるが、これはより小さいそうである。このワット・ネランダバンには比丘2人、沙弥4

人、寺男10人居住し、説教はワン・プラの日に行っている。パンサー中は毎日行い、人人は五戒を受けるそうである。托鉢は行わず、毎日10軒づつきめて食事を当番でお寺に運んでいる。田舎に入ると多くこの方法をとっているようである。この寺の境内に接して小学校がある。4年制で85名の男女生徒が学んでいる。2年前にできたそうである。

9 む す び

今度実際に調査した寺院数は約80寺であるが、一般的にいえることは、宗教的活動はワン・プラの日に限られ、パンサー中はより活発になるということである。そして田舎に入ると、寺院のある部落と寺院のない部落とでは、教化や信仰の程度においてかなり相違があり、寺院との関係の密度も自ら異なるようである。また国民皆僧といったような風習があるために、仏教はタイ人の社会生活とひとつになっていて信仰心は強いが特に仏教の専門家とみられるような指導的比丘や在俗の仏教者はすくないようである。国民の宗教意識も知識人の間ではかなり高いが、まだピー迷信的な信仰と混合したような信仰が多い。特に田舎の人人の間ではピー信仰が仏教の信仰と区別されないで一般的に受容されているようである。これは教育の普及とともに次第に消滅するであろう。次に男子に比し女子の宗教教育が軽視されているようである。女子の宗教教育は寺院に食物をはこぶ母親について行ったりすることからはじまるといわれるが、戒律の厳しい僧院では女性に接する機会が乏しく、女子のための宗教教育機関は非常に稀である。Sunday school 等ではかなり多くの女子学生も見つけられるが、田舎では女子への宗教教育はほとんど行われていない。これに比し、男子の宗教教育は寺男制度によって、少年の頃から寺に宿泊し比丘たちの感化をうけるので、比較的によく行っているようである。まだいろいろ論すべきことは多いが、一応これで終り、次の研究調査にまつこととする。

- 5) このシステムをホワ・ムアット・ソン・コー (Hua muad songk how) というが、とくに、東北タイにこの制度が行なわれているようである。